

次の文章を要約し、次に要約をふまえてあなたの意見を書きなさい。要約と意見は、それぞれ400字以内にまとめなさい。

### 「自分らしさ」の罫

「自分探しの旅」とか「自分らしさの探求」というような言葉を僕はこれまでずっと「なんだか嫌な感じの言葉だな」と思っていました。それはそういう事を口にする人間が、しばしば「管理する側」の人間だったからです。彼らは別に子どもや若者たちが成熟し、変化して自由に生きることを求めているわけではありません。そんなことをしたら管理しにくくなるに決まっているからです。

「自分らしく生きる」という、一見すると子どもたちを勇気づけるように聞こえるメッセージは、実はその本音のところでは「はやく『自分らしさ』というタコツボを見つけて、そこに入って二度と出てくるな」と言っているのではないのでしょうか。

自分らしさを見出すことにそれほど価値があるのだとしたら、「これが『自分らしい生き方』です」と宣言した後に「あ、やっぱりあれは無しにしてください。違う生き方がしたくなっちゃいました」と言い出すことにはかなりの心理的抵抗があるはずだからです。一度生き方を決めたら、自分の「ポジション」を決めたら、あとは一生そこから出てはならないという有形無形の圧力を「自分らしく」という呪符<sup>注1</sup>が生み出している、ということはないのでしょうか。

どうしてこんなことになってしまったのか。

それは今の日本社会が、「成熟する」ということが「複雑化」することだということを認めていないからだと思います。逆に、成熟することは「定型に収まって、それ以上変化しなくなること」だと思って、そう教えている。でもそんなわけがないじゃないですか。

生物を見てごらんください。単細胞の生物が細胞分裂して、どんどん複雑なものに変わってゆく。それが成長であり、進化である。人間だって同じです。成長するにつれて、どんどん複雑な生き物になるに決まっています。考え方が深まり、感情の分節が極めて細かくなり、語彙が豊かになり、判断が変わりふるまいが変わるそういうものでしょう。

古代の中国の呉の国に呂蒙という武人がいました。武勇に優れ、それでみごとに立身出世を遂げたのですが、学問がなくて「阿蒙」（おバカさん）と人に呼ばれていました。主君の孫権がそれを嘆いて、呂蒙に「武勇ばかりではなく、学問を修めよ」と説きます。呂蒙は主君の助言に素直にこたえて、学問に励むようになりました。しばらくして、同じ幕僚の魯肅と対談したときに、呂蒙の見識の高さと知識の深さに魯肅は大いに驚き、「彼は以前の呉下の阿蒙にあらず」と嘆息しました。それに対して、呂蒙は「士別れて三日ならば、即ち更に刮目して相待すべし」と答えました。士は三日経つと別人になっている。だから、目を大きく見開いて、その人を見よ、と。

これは『三国志』にある逸話で、僕が子どもの頃までは、人間が成長するとはどういうことかを教えるインパクトのある事例としてよく引かれたものです。でも、僕は久しく、この言葉を口にする人に会ったことがありません。

今の日本社会に瀰漫<sup>びまん注3</sup>している「生きづらさ」はこの社会の仕組みそのものが「生物の進化」に逆行しているからだというのが僕の考えです。

僕から皆さんへの個人的な提案は、「自分の身のほど」なんか知らなくてもいいんじゃないですかということです。「自分らしさ」なんか別に慌てて確定することはないです。三日前と全然違う人間になっても、それは順調に成長しているということですから、気にすることないです……というようなことです。皆さんが罫から這い出して、深く呼吸ができて、身動きが自由になったような気がする、それが一番大切なことです。僕はそう思います。いかがでしょう。

(内田樹『サル化する世界』による。一部改変)

タコツボ……自分だけ、または仲間内だけの狭い世界のたとえ。

呪符……種々の災難をしりぞけ、幸いをもたらすとされるもの。お守り。

瀰漫……広がり満ちること。はびこること。